

ハンデキャップのある方々に対する木育プログラムの提案

—福祉分野での木工と遊びの実践—

森と木のクリエイター科 木工専攻 若田 拓也

1. 背景

岐阜県では、子どもから大人までのすべての人々が、木や自然とつながることで豊かな心を育むことを目的の一つとして、「ぎふ木育」を推進している。木製品に触れる、木のものづくりをする、自然体験活動を行うなど、一言で木育と言ってもプログラムの内容は様々である。

私は在学中、木育に興味を持って学んできたが、「すべて」という言葉に疑問を持った。前職は医療機関で勤務しており、現場に目を向けると医療的ケア児や障害者などは、自然に触れる体験の機会が少ないように感じていた。

木育（木工）とホスピタリティを掛け合わせ、ハンデキャップのある方々が、心身ともに豊かになれる体験を提供したいと考えた。

2. 目的

これまでプログラムの対象となりづらかったハンデキャップのある方々を対象に、木のものづくりや木のおもちゃを活用した、木育プログラムを考案、実施する。

3. 研究内容

3-1. ヒアリング

3-1-1. 価値

木育（木工）活動を実施することで、病気や障害が治るわけではないため、まず当研究の意義がどこにあるのかを聞き取り調査することにした。

認定 NPO 法人 芸術と遊び創造協会の遠藤基子氏は、病児を対象としたおもちゃと遊び支援を行っている。

遠藤氏からは、「子どもたちは毎日が楽しく心が満たされている時、困難を克服する勇気が持てる。楽しい時間を、家族や仲間と一緒に過ごすことだけでも十分な価値となる」ということを聞かせて頂いた。

3-1-2. 現状の活動事例・課題

ハンデキャップのある方々を対象とした活動事例と課題を把握するために聞き取り調査した。

ぎふ木遊館では、不定期に特別支援学校や放課後等デイサービス事業所の子どもたちを施設に受け入れ、おもちゃを使った遊びの場を提供している。一方で、職員の河方勇一郎氏は、「ものづく

りのような体験プログラムは実施できていない。遊びとは違う、ものづくりから得られる豊かさや価値も届けたい」と述べていた。

3-1-3. 現場の意識

病院や福祉施設で木育（木工）は必要とされているのか、ニーズについて聞き取り調査した。

ふじわら在宅ケアクリニックの稲葉明日香氏からは、「木には精神安定や身体機能向上の効果が期待できる。福祉や介護施設などで、予防やリハビリ目的で木を使うということには理解が得られそう」という言葉を頂いた。

3-2. 方針

ヒアリング結果から、心のケアや予防という観点で木育（木工）には価値があり、このような活動を行政からも求められていることが分かった。

治療が最優先の病院やクリニック（医療分野）では、木などの自然物は、感染源となる細菌が存在する可能性があることから持ち込みが制限されている。一方で、レクリエーションの一環として工作や遊びに自然の素材を取り入れている、介護施設や障がい者支援施設（福祉分野）などもある。今回は、木育プログラムに理解を得られた 2 つの福祉施設を対象とし、活動を実施することにした。

3-3. プログラム実施

3-3-1. 木のスプーン作り（1回目）

<場所>医療法人かがやき（岐南町）

▶重度の疾患及び障がいのある方、家族、地域支援者、職員（参加人数 40 名）

<目的>ものづくりを通して、木材の香りや手触りを楽しむ。

<実践内容>CNC 加工で型取りしたヒノキのスプーンを、紙やすりを使って滑らかになるまで研磨する。

○結果・考察

意思疎通の難しい認知症の方がスプーンを片手に笑顔で話されていたり、その笑顔を見て家族が喜んだり、幸せの輪が広がっていた。また、故人の写真に向けて「あなたは手が器用でしたね」と会話されている方の姿からは、プログラムが思い出を引き出すきっかけになったことも分かった。

職員からは、「薬臭い施設の中で、香りを体験することはとても刺激がある」と評価を頂いた。一方、作業マニュアルが欲しいとの指摘があった。



左)笑顔で話す認知症の方

右)故人の写真立てを側に置き作業する様子

3-3-2. 木のスプーン作り (2回目)

〈場所〉認知症カフェ まーまれーど (美濃市)

▶軽度の疾患及び障がいのある方、家族、地域支援者、職員 (参加人数 40 名)

〈目的〉木のものづくりを体験し、自然や森に関心を持つ。

〈実践内容〉スプーン作りの作業は 1 回目の内容と同じだが、ヒノキの丸太や板、曲物や下駄を準備し参加者に見せることで、森での木の姿や生活道具としての使われ方もレクチャーした。



左)ヒノキの丸太、板

右)ヒノキを使った生活道具 (曲物、下駄)

○結果・考察

研磨したスプーンの滑らかさを、参加者同士で交換し見せ合うなどして会話が弾んでいた。

参加者からは、「初めての方ともお話しできた」、「無心になって作業できた」などポジティブな意見があった。また、作業が終わった途端、会話が途絶えているグループがあり、スプーン作りが会話の呼び水となっていることも実感できた。



左)木のスプーン完成品

右)参加者が紙やすりで研磨している様子

3-3-3. 木のバランスゲーム

〈場所〉認知症カフェ まーまれーど (美濃市)

▶軽度の疾患及び障がいのある方、家族、地域支援者、職員 (参加人数 35 名)

〈目的〉木のおもちゃ遊びを通して、木の手触りや会話を楽しむ。

〈実践内容〉サイコロを振って出た目の形、樹種のスティックを、一本ずつ引き抜いていく。リングが落ちたり、バランスを崩して倒れた場合はや

り直し。参加者同士で協力し、スティックが残り 3 本になることを目指す。

○結果・考察

木のおもちゃにはヤマザクラ、ホオノキ、ミズメを使用した。色の違いや用材としての使われ方の違いを説明すると、とても興味を持って聞いていた。また、参加者同士が相談しながら攻略法を練っている姿も見られた。

参加者からは、「連帯感や達成感が感じられた」、「夢中になって楽しく過ごせた」、「工業製品にはない木の温かみを感じた」と意見を頂いた。

五感の刺激と心のケアに加え、心が前向きになるような成功体験、さらに考えることで発想力や表現力が鍛えられるといった、認知症予防の要素をたくさん提供できた。



左)木のおもちゃ (バランスゲーム) 完成品

右)参加者が遊んでいる様子

4. 全体評価

認知症カフェ まーまれーどの渡邊安見子氏からは、「医療や福祉現場には一般のフィールドにはないハードルがあるが、活動を通して参加者の笑顔とコミュニケーションが今まで以上に引き出したということは、木育プログラムを現場に持ち込む価値は十分にある」という言葉を頂いた。

5. 結論

当研究を通じて、一般の木育プログラムを考える時と同じように、五感を使ったり成功体験をすることは、福祉分野の活動でも意義のあることだと分かった。また、事前に参加者の身体的及び精神的制約や特性を共有し、安全の配慮や個別のサポート体制を整えることで、ハンデキャップのある方々に対して木育プログラムを実施することは、当初懸念していたよりも実は容易に実現できることが分かった。

6. 今後の展望

ハンデキャップのある方々への体験プログラムは、福祉分野での活動を通じて実績を積み重ね、いずれは医療現場で実践することを目指す。卒業後も引き続き、福祉分野に有効なプログラムとはどのようなものか、さらなる専門性を持たせた木育 (木工) プログラムを考案、開発していきたい。